

—この仕事に就いたきっかけは?

大学時代の研究室の先輩が動物検疫所に就職したのが、動物検疫という仕事を知るきっかけでした。ちょうどそのころ、BSEや鳥インフルエンザといった家畜の伝染性疾病が問題になっていて、バイト先の焼き肉店でも、その影響でお客さんがぱったり来なくなりました。動物の病気でも、社会に大きな影響を及ぼすことを実感しました。

畜産学を専攻していたこともあり、家畜の衛生にも興味があったので、いろいろと調べ、自分のやりたいことに合っていると思い、動物検疫所の職員を目指しました。

—仕事内容は?

動物検疫所の一番の目的は、輸入される動物や畜産物を介して、伝染性疾病が海外から日本国内に侵入するのを防ぎ、逆に日本から海外に拡がるのを防ぐことです。



永野 敬太郎 Keitaro Nagano

農林水産省 動物検疫所 神戸支所 岡山空港出張所 家畜防疫官
(2005年3月 生物生産学部卒業)

やりたいと思った仕事。
懇切丁寧に、明るく元気に!

取材を終えて



ブルーのシャツの制服がさわやかな永野さん。インタビューが始まると、日々お客さんに説明しているように、懇切丁寧かつ笑顔で話してくれたのが印象的でした。学生時代の経験や考え方を生かして仕事をしている永野さんの姿勢を見習って、僕もがんばりたいと思います!

岡山空港では主に、輸出入される畜産物の検査、旅行者が海外からお土産として買って帰るハム、ソーセージ、ビーフジャーキーなどの検査を行っています。お土産の肉製品は税関構内の動物検疫カウンターで検査します。肉製品は持ち込みができる国とできない国があり、持ち込みができる国であっても検査証明書のついていない肉製品は国内に持ち込むことはできません。肉製品をお土産として持ち込むことはとても難しいことなんです。人間には感染しない病気もあるので、「だったらいいじゃん」と言われる方もいますが、万が一お土産の肉製品を介して日本国内に病気が侵入したらその影響は甚大です。そういった家畜の伝染性疾病を水際で阻止することが私たちの仕事です。

—今、一番大事にしていることは?



緊張されるお客さんもいるので、明るく元気に接することを心掛け、愛される防疫官を目指しています(笑)。

最近では、犬・猫を海外に連れて行くお客さまが多いのですが、短期間の旅行でも日本に連れて帰るには最低でも約2カ月、海外在住の方が現地の犬・猫を連れて帰るには8カ月以上も準備期間がかかるんです。手順が狂うと連れて帰れなくなるので、懇切丁寧に説明します。輸入した犬の写真を「こんなに大きくなりました」と送ってくださる方もいて、感謝されたときには、やりがいを感じます。

—後輩たちへメッセージを!

人間関係を大切にしてください。僕自身、大学時代の友人や先輩との関係は今でも続いていて、みんなで過ごす楽しい時間や、友人や先輩の経験談、苦労話は「がんばるぞ!」というモチベーション向上につながります。学生時代の友人は、良き友であり、同じ目標を目指したライバルでもあるので、社会に出てできた友人とは違った居心地の良さがあります。一生ものの人間関係を学生の間につくってほしいですね。



社会の第一線で活躍している先輩たちの職場を訪ねて、突撃インタビュー。
仕事のことから学生時代に身に付けておくべきこと、はたまたプライベートの話まで、
私たち学生の素朴な疑問・質問にお答えいただきました。



羅針盤

compass

OB&OG紹介

—仕事内容は?

木材や石粘土・石こうなどを材料に、クラシカルボードというアンティークテイストのオリジナルインテリアを作っています。結婚式で飾るウエルカムボードやウエルカムベア、店舗のメニューやディスプレイなど、お客さまの要望に応えながら一つ一つ手作業で制作しています。ほかにも、数年かけて編み出したオリジナルの筆文字スタイルを「ほっこり筆ペン文字」と名付け、それを教える「ほっこり筆ペン文字教室」を開催しています。

—現在の仕事を始めたきっかけは?

昔から絵を描いたり、ものを作ったりするのがすごく好きでしたが、大学を卒業する時点では、それを仕事にして生活していく自信がありませんでした。それで商社に就職し、7



年間勤めましたが、どうしてもあきらめきれなくて。でも、やはり自信がなかったし美大でもう一度学ぼうと思っていたら、知り合いの経営者の方が「一度、大学で美術を勉強したんだろ。それを形にできないよ。一生学ぶだけならそれでもいいけど、仕事にしようと思えば、今、あなたにあるもので形にすることだ」と。そう言われて考えたとき、会社で働きながらも、趣味で友人から頼まれてウエルカムボードなどを作っていたことを思い出し、「私が持っているものはこれだ! これしかない」と決心したんです。



—大変だったり悩んだりしたことは?

日々やりがいを感じていますし、大変なことやつらいことにはないですね。やっぱり好きなことで、かつ、得意なことを仕事にした方がいいと思います。好きだけど不得意なことだと、しんどかったり、がんばっても結果が出なかったりしますが、好きでかつ得意なことを仕事にすると、自分も楽しいし、社会にも役立てると思います。

自分は何が得意かっていうのを見極めるのが、大学時



沙琴 Sakoto

クラシカルボード作家(1997年3月 学校教育学部卒業)
アトリエ モン・ペシェ・ミニランを2004年に設立し、制作活動中
<http://www.sakoto.com/>

—仕事は、自分のできる限りやり尽くす。

代なのかなと思います。私もすごく悩みましたが、本当にやりたいことは何か、何をしたら幸せなのかは自分にしか分かりません。自分がどういう人間で、どういう特質があって、どういうことが得意で、社会に対して還元できるのか、時間が十分にある学生時代にしっかり悩んでください。

—大切にしていること、今後の目標は?

ベストを尽くすことですね。昔はパーフェクトじゃないとダメだと思っていて、自分の実力以上のものを望んで、できなくて落ち込んでいました。でも、私は私でしかないし、精いっぱいやって結果が出なかったら納得できます。お客さまに満足されているかどうかはすごく気になりますが、そこで悩むんじゃなく、どんな仕事でも、自分ができる限りやり尽くしたものを提供します。それでダメなら仕方ないと割り切ってしまうくらい、一瞬一瞬にベストを尽くしています。

いつか、生活は豊かなのになぜか窮屈そうに見える日本の子どもたちを、絵画教室などの美術を通して解放してあげられるような取り組みをしたいと考えています。

大人で落ち着いた雰囲気を持つ沙琴さん。おしゃれで味のあるすてきなアトリエ空間との相乗効果で、終始圧倒されていました(笑)。「今の自分に何ができるのか?」ありふれた言葉も、沙琴さんが語ることで、深く胸に突き刺さりました。

取材・記事/教育学部3年 今津 大紀

